

『雁の草子』にみる異類婚姻譚の悲恋

— 狐女房譚との比較を中心に —

大坪 俊介

『雁の草子』は、題名どおり雁と人間の悲恋を描いた作品であり、京都大学附属図書館蔵の絵巻一軸のみが残る御伽草子である。従来の研究では先行文芸の影響が主に論議されており、異類婚姻譚的位置づけが十分になされてきたとはいえない。ここでは、『雁の草子』に見られる先行文芸の影響を確認しつつ、異類婚の中でもひときわ情緒的に描かれることが多い狐女房譚との比較を中心に考察するものとする。

『雁の草子』には和歌の引用が多く見られ、『和漢朗詠集』や『古今和歌集』などその引用文献は様々である。また、特定の和歌でなく、枕詞や歌枕、その他よく好まれた歌材等を使用する箇所も見られるが、それらのほとんどが引用文献の和歌を踏まえた上で作中に使われており、場面がより引き立つような効果的な配置がなされている。和歌以外の先行文芸の引用も作中には多くあり、白居易の歌を引く箇所や、葛城山の一言主の神の故事を引く箇所などが見られるが、和歌に比べると表面的な引用にとどまっている箇所が多い。これら作中に見られる先行文芸の影響の一つとして、蘇武の故事を引用している箇所が挙げられる。蘇武の故事は『漢書』列伝二十四を典拠とし、日本においては『平家物語』『今昔物語集』『宝物集』など多くの作品に収録されている。この蘇武の故事の中に、雁が蘇武の故郷に手紙を届けるという場面があり、そこから「雁書」等の言葉も生まれ、雁は広く通信を司る生き物として扱われることとなった。『雁の草子』においても雁が夢枕で玉章を届けるという場面が見られることから、作者は蘇武の故事を念頭に置いた上で『雁の草子』を制作したものと考えられる。

異類婚姻譚において異類の正体がどのように展開に影響するかを見るために、雁と狐の文学上での扱いをそれぞれ例として挙げる。雁の場合、先に挙げた蘇武の故事から、手紙や通信に関する歌が多く詠まれており、さらには秋に来て春帰るといふ習性を持つことから、花との別れを歌に詠まれてきた。『雁の草子』でもこの二つの特徴は取り入れられており、いずれも物語の展開に大きく関わっている。狐の場合は、一夫一妻制であり、子育てが人の目に愛情深く映ることから、古来より多くの異類婚姻譚の主役となってきた。そのため、狐の異類婚姻譚では人との恋愛が描かれる一方で、子供が話の中心となつていくことも多い。また、素早い動きで人前から姿を消したりすることから、怪異を起こす生き物としても多くの作品に登場している。このように、性質や故事によって、異類の文学上の扱いはある程度方向付けられている。

『雁の草子』をはじめとする異類婚姻譚の話は、悲恋型、蛇婿型、巧智型の三つに分けることができる。それぞれの型の特徴としては、悲恋型では男女の恋愛や別れに焦点が当てられていること、蛇婿型では男の正体を暴くことに焦点が当てられること、巧智型ではいかに異類を撃退するかに焦点が当てられていることが挙げられる。悲恋型は異類女房型の展開にやや近いが、異類婿型では異類は撃退の対象として見られることが多い。

狐女房譚と『雁の草子』を比べると、子供の有無をはじめ、その展開には相違が大きいことがわかる。特に別れの場面では相違が顕著で、狐女房譚では正体の露呈が主に別れの原因となつていふことに対し、『雁の草子』では春帰るといふ習性が別れの原因であり、正体の露呈はその後にやってきている。また、『雁の草子』ではその後夢枕の玉章で雁の死が告げられるという二重構造で別れの場面が描かれていることも特徴的である。同じく悲恋が描かれる異類婚姻譚であっても、『雁の草子』が悲恋譚としてより突出しているのは、雁の習性に加え、文学的性質を

うまく取り込んで二度の別れを描いたという点にあるといえるだろう。

『雁の草子』が様々な先行文芸や異類婚姻譚の影響を受けながら製作されたことは、ここまで確認してきた通りである。神婚譚の影響を色濃く受け継ぐ出会いの場面から、二重構造で描かれる別れの場面まで、多くの和歌や故事が引かれ展開に花を添えている。狐女房譚は、子別れ、もしくは夫婦間の愛情に焦点を当てる形で異類婚の悲恋を描いてきたが、『雁の草子』は雁という生き物の性質をうまく作品に取り入れ、特に別れの場面に力を入れることで、異類婚における悲恋の新たな描き方を模索してみせたということが出来るだろう。

(大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程)